昭和後期集

日本推理小説大系 9 東都書房

日本推理小説大系第9巻

昭和後期集
定価三八〇円
著者　山田風太郎　大坪砂男　宮野村子
岡田鯱彦　朝山蜻一　香山滋
鷲尾三郎　永瀬三吾　大河内常平
楠田匡介　山村正夫　飛鳥高

発行者　西村俊成
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　藤沢製本株式会社
発行所　東都書房
東京都文京区音羽町二丁目一九
電話　東京（九四一）三一一一
振替　東京　七二七三二
落丁乱丁本はおとりかえします

昭和三六年三月二〇日第一刷

目次

山田風太郎　虚像淫楽 5
大坪砂男　天狗 21
宮野村子　柿の木 29
岡田鯱彦　薫大将と匂の宮 57
朝山蜻一　巫女 137
香山滋　キキモラ 151
鷲尾三郎　雪崩 167
永瀬三吾　売国奴 195
大河内常平　クレイ少佐の死 231
楠田匡介　逃げられる 255
山村正夫　獅子 267
飛鳥高　二粒の真珠 285
解説　中島河太郎 297

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

山田風太郎

虚像淫楽

一日目

晩春の蒼い夜靄の静かに流れる或る夜更であった。その靄を鋭い警笛の音で切裂いて、一台の自動車が聖ミカエル病院の前に停った。

ちょうど玄関の真正面の廊下を歩いていた若い看護婦の片桐アキは、入口から屍骸のような女を背負った十七八の少年が、よろよろと入ってくるのを見た。

「どう、なさいましたの？」

「昇汞をのんだのです」

少年は歯をかちかち鳴らしながら云った。背中の女の身体が蛇のように波を打って、吐きあげた吐物が少年の肩から胸へしたたった。

「いま、のんだのか？」

偶然、薬局に入りかかろうとしていた、内科の千明という医学士も、つかつかと駈けよって来てたずねた。

「いえ。二十分――三十分ほど前です」

「この近くの人じゃあないのだね？」千明は玄関の外の自動車を透し見ながら云った。

「はい、牛込の矢来町です」

「牛込！」と千明は叫んだ。「矢来町から！　近くに医者か病院はなかったのか？」

「ねえさんが、この病院へ連れてってくれと云ったのです」

けげんな顔でふと背中の服毒者を覗きこんだ片桐アキは、突然息を大きく吸いこんで、

「まあ、森さん！　弓子さんじゃあないの？……先生、あの森弓子さんですわ！」

そう云われてもまだ思い当らぬ顔つきの千明医学士も、藍のように蒼い女の顔を覗きこんで、やっと一年前まで自分の下で働いていた看護婦森弓子を思い出し、ちょっと感情の微風がその面に流れた。

「森君」と彼は女の肩に手をかけて、やさしい調子で、「どれくらい、のんだのかね？」

昏迷状態の女は薄目をあけて、近ぢかと覗きこんでいる千明の顔をじっと眺めた。そのうるんだ瞳の奥に、思いがけなく微笑のようなものが仄光って消えた。彼女はしずかにはっきりと云った。

「先生、八グラムばかりです」

その声はふるえて、沁み入るようにきれいだった。

「八グラム！」千明の頬は電気に打たれたようにひきしまった。女の手頸をとり、すぐに少年の身体ごと突きとばすように押し出しながら、片桐アキに「すぐ治療室につれて行ってくれ給え。胃洗滌をやる」

千明医学士は青銅の彫刻のような鈍い動かぬ表情を持った人であった。併し、こういう場合の彼の動きはまるで別人のように、敏捷で正確で、活気に溢れていた。胃を洗って、ビタカンファーを打つ。それから腸洗滌――この時、彼は「お！」と低く叫んで手の動きをとめた。その真白な尻の肉の上を、紫の蛇のような痣が走って背の方へ消えているのを見て、片桐看護婦も息をのんだ。すぐに千明は当面の操作を続けはじめ、それに追われて片桐アキも、一瞬間の感情の潮騒をふと忘れた。――磁皿の上の糞塊、ピペットを沈降する血柱、そして唯一個の患者。その世界へ看護婦を追いこんで、尚お忘我の愉悦を覚えさせる力が千明医学士にあった。

千明は服毒者の胸に聴診器をあてた。その眼は、ここにも、乳房の間から脇腹の方へ這う数条のみみず腫れの上に落ちていた。

「おい、森君、いったいどうしてまた昇汞なんかのんだのだね？」

女は、薄目をあけて千明を見た。その瞳の奥にまた異様なひかりが微かにともり、唇がふるえたが、しかし答えなかった。

「ねえさん……」

扉のところで、かすれたような叫びがした。

アキは夢から醒めたように振返り、例の少年の姿を見て、突然なぜか身体がふるえるのを感じた。――蠟の如く、かたく蒼ざめて、少年の姿は美しかった。鎖のように両腕をねじり合わせて、併しその灼けつくような眼差しを投げている涙の眼――その眼は、なぜか看護婦の心に、押絵に似た鋭い感動を与えたのであった。

「おお」と千明が云った。

「君は、森君の弟さんかね？」

「いえ、ぼくは酒井卯助っていいます。ねえさんは嫂です。今、酒井っていうんです」

「結婚なさったんですね、ここを出てから――あたし、ちょっとそんなことを聞きました」

と、アキが云った。

「そう、で、嫂さんは、なぜ毒をのんだの」

「――ぼく……知らないんです」一分間ほどの動揺の後、卯助は云った。また一分ばかりして彼はにじみ出る額の汗をぬぐって尋ねた。

「嫂さん、だいじょうぶでしょうか？」

千明は聴診器を耳からはずし、患者を眺め、そして卯助の傍へ歩いて来た。

「嫂というと御主人は――君の兄さんはいないのかね？」

「……います」

卯助は白痴のように乾いた声で云った。

「いたら、兄さん御自身も来られた方がよいだろう」小さい、厳粛な声で「嫂さんは、非常に危険な状態にある」

打ちのめされて卯助は惨めな泣顔を作った。路で美しい玩具を壊して途方にくれて家の方を眺める子供みたいに扉を振返った。突然彼はきっと顔をあげ、叫ぶように、「兄さんを呼んできます」といって廊下へ飛び出して行った。

「千明先生」

おずおずと後へ近づいてきた片桐看護婦が呼びかけた。二人は、隣の医局へ入った。扉を閉じると、アキは、

「御主人を呼んでこいとおっしゃって、先生……ひょっとすると森さんが――いえ、酒井さんが毒をのまれたのは……」

扉の陰で消毒液に手を浸していた千明医学士は、ふと手をとめて看護婦の顔を眺めた。

「あのみみず腫れは――ふむ、夫婦喧嘩をしたのでないか、と君は云うのか？」ぶっきらぼうに手をふきながら「それにしても、この場合、やはり来て貰った方がよい。心音は極めて弱い。何しろ昇汞だ。明日までも己は保証できんからね」

「はい……でも」アキは蒼い顔で考えこんでいた。暫くして眩しそうに千明を見上げ、小さな声で呟いた。「若し、そうだとしたら――結婚って、恐ろしいものですわね……」

千明は扉に手をかけていたが、ふと振返って微笑した。

「そうそう、君は近くお嫁入りするのだったね？　はは、一々患者の不幸な人生を見て悟りを開いていたら、医者や看護婦は木乃伊になってしまう。患者はベッドの世界だけで考えるべきだよ、――くだらぬ取越苦労はせんでも、第一君なら必ず幸福な……」

「先生」とアキは頬を微かにあからめて「先生は、なぜ結婚なさらないんですの？」

「僕かね？」廊下に出て、千明は低く笑った。

「それはね、君――これは、西洋の或る偉い人が云った言葉だが――最もすぐれた男と女を望むなら、それは独身者と妻の中にある、とつまり、僕があんまり立派すぎるからだろうよ……ははは」

「本当に、先生は立派すぎるのですわ……」

そう呟いた片桐アキの溜息は扉でさえぎられ、正確な跫音が廊下を遠ざかって行った。

二日目

しかし、その夜には少年も夫も来ず、とりあえず第三病棟十一号室に移した服毒者を見護ったのは千明と片桐看護婦だけであった。明方になって体温は急峻に上昇して三十八度四分となり、脈搏は増加して一二六を算した。

朝になって、科長の塙博士が登院して来た。千明はその経過を報告した。

「いったい、どうして毒をのんだものかね」

と博士は白髪の童顔をかしげた。

「それが何にも云わないのです」と千明は苦笑して、「身体を見ると、到るところ新旧無数の痣があります。片桐君は、或はこの痣が夫の虐待によるものではないか――毒をのんだのも

そんなことが原因ではないかと、想像しているのですが、何を尋ねても一言も返答してくれません。質問に対して表情に反応が見られますので意識の明瞭なことは確かなのですが、兎に角、一切口を緘して通すつもりと見えます。——最初ここへ運びこまれた時、幾らくらいのんだ、と尋ねましたら、八グラムです、と明瞭に答えましたが、それっきりなので……」

科長を送って病室の外へ出ると、少年酒井卯助が立っていた。

「先生、ねえさんは……」

窓硝子をゆすって風が強く、虚空を吹雪のように桜の花びらが飛ぶのが見えた。蒼い空は黄塵に霞んで、白い淡い朝の光が中学の制服をつけた少年の姿をもの哀しく浮かび上らせた。ちょっと触れると倒れそうな脆い姿勢を、絡みつくような必死の眼色が支えていた。

「ねえさんは……まだ、大丈夫だ。君、兄さんは？」

ふいに、卯助の眼に狂的な光がきらめき、千明をつきのけると病室へ飛びこんで、押し殺したような声を尻上りに上ずらせて、こう叫んだ——

「ねえさん！　兄さんも……毒をのんで死にました！」

はっとして、片桐看護婦は患者の方を見た。

この突然な恐ろしい報告に、弓子は薄く眼を開いた。が、その頬はびくりとも動かず、細い眼の間から少年に向って投げられたのは冷たい、刺すような光だけであった。……走り寄ろうとしていた卯助は、見えない鞭にはね返されたように立ちどまった。

ぽかんと口をあけたのは、寧ろ千明医学士の方であった。

「兄さんも！　おい、それアいつの話だ？」

「きのうの夜、ぼくがここから帰って行ったら、兄さん、死んじまっていたのです。あたり一面血へどだらけで……枕もとに昇汞の瓶が転がっていました……」

「君の家にはほかに誰もいないのか？」

「いないんです、三人だけだったんです。……いったい、どうしたらいいのか、ぼく、それを嫂さんに聞こうと思って……」

「医者は呼んだのかね？」

「いえ、僕が帰ったときには、もう冷たくなっちまっていたので……」

千明は突然、白衣の釦をはずしながら、扉に手をかけた。

「死んだって……君、それア医者が見なくちゃわからん。僕が行って見てあげよう。君も来たまえ」

ひる過ぎになって、千明はぶらっとひとりで帰って来た。

「驚いたね、君……」

と彼は先ず片桐看護婦に云った。「兄という人間を見たら、去年の春頃、胃潰瘍で入院していた男じゃあないか。君は忘れたかね、酒井房太郎というのだよ」

「憶えています」とアキは首をかしげた後に云った。病人と看護婦という特殊な関係でもなかったら、それはすぐに忘れられてしまうに違いない。平凡な、影の薄い、変に遠慮深い男であった。

「森さんが結婚なさったというのは、まあの酒井さんでしたの！　それで、やっぱりいけませんでした？」

「うむ、死んでいた。死んじゃいたがね……」

と千明は急に暗い顔になって考えこんでいたが、「まあ、いいさ、警察が来てあの子を色々調べていたから、そっちで片づけてくれるだろう」と煙草に火をつけた。

「あの酒井って男は薬品会社の会社員だったらしいね。昇汞はそっちで手に入れたのか、まさか森君がここから持って行ったんじゃあるまい。森君をあの子が運びだしたあとで酒井が服んだとすれば、こっちはまだ息があるのに向うはもう絶命ったところからみると、無論手当の有無が重大な理由でもあるが、それ以外に昇汞に対する抵抗力の相異ということもあるだろうね」

暫くして、牛込の警察署から刑事が一人やって来た。科長と千明がこれに会った。卯助を調べたその刑事の言葉によると、実は弓子は房太郎に毒をのまされたので、そのあとで夫も自殺したらしいということであった。

「あわただしく自動車が出て行った気配に、隣家の老婆が妙に思って、酒井の家を覗きに行っ

たら、玄関に主人が蒼い顔で立っていて、何を尋ねてもロクな返事もしないので、すぐに帰ったというのですが……一体、どうして妻君に毒をのませ、自決したものか……」

と、刑事は話しながら病室に入って行った。

患者は血尿を出し始め、同時に裏急後重が著明となり出していた。その下痢便も血性であった。女は石像のように沈黙していた。塙博士に注意を受ける迄もなく、刑事は訊問を断念して、一たん引返すよりほかはなかった。

それを送り出した後、科長はふと云った。

「あの女は、いったい、なぜこの病院をやめたのだったけね？」

「それは」と千明は無造作に云った。「結婚するためでしょう」

「千明先生」と考えこんでいた片桐アキが顔をあげた。「先生、いちど、あの森さんをお打ちになったことがございましたわね？」

「なんだって？　打った？　記憶がないね、僕は女なんかをそうムヤミに殴りゃせんよ」

「いえ、ありましたわ」とアキは急にせきこんで、「たった一度ですけど、何のときだったか森さんの頬っぺたをぴしりとひとつ……」

千明は突然立ち停った。暫くして、その青銅のような頬に苦笑のかげが這いのぼった。

「ふむ、そう云われると、そんなこともあったね。そうだった。アドレナリンだ。〇・五cc以上一度に打ってはいけないと口を酸っぱくして云ってあるのに、あれがうっかり一ccやっちまって、患者が痙攣を起しだし、すっかり閉口したことがあった。その時だよ……いや、あの森君には困ったよ」

千明は記憶が次から次へと浮かびでて来たと見え、急に沈んだ顔色になって科長に云った。

「思い出しました。そのアドレナリン事件以来、あれは何べんもとんまをやった。故意としか思われないような、非常識な間違いばかりです。併し看護婦になめられると思うほど僕は自分を見縊ってはいないので、あれは殴られてから僕に対して神経過敏になったのだろうと考えました。いや、今にして考えれば、森君は丁度あの頃酒井と恋をしていて、その為め心うつつになったせいでしょうが、何しろ僕はこういう人間で、そんな微妙な方面にはさっぱり頭が廻らん。で、それ以後の失敗は黙って見ていて、そしてほかの科へ廻って貰ったのでした。……併し片桐君、それで森君がやめたのだと君は云うんじゃあるまいね？」

「とんでもございません……いえ、ただちょっと思い出しただけなんです」

「話は別だが」塙博士はパイプに火を点じながら、千明に笑顔を向けて、「君は少しものの哀れを知らん過ぎるよ。それもよいが……どうじゃね、いつかの話は？　考え直して見てくれたかね」

「いや、全然、今のところ」と千明は酷薄無情な首のふり方をして、「娶りたる者は如何にしてその妻を喜ばさんかと、現世のことのみ思い煩らい、娶らざる者は如何にして主の――は、有難うございますが、今の私にとって主はシュワルツマンでして」

千明医学士の目下の研究の対象は、縁談ではなくて血清学上のシュワルツマン現象なのであった。

三日目

「ねえさんは……」

三日目の黄昏、また蹌踉と卯助が病院の玄関を入って来た。一夜を隔てたばかりなのに、警察官の訊問にもみぬかれたと見え、すっかり憔悴した顔色であった。

「まだ、大丈夫だ」

しかし、死の黒い手は既に腎臓を摑んで、尿閉がきていた。漸く口内炎症状が現われて歯齦部に壊死が認められた。

「嫂さん、しっかりして……」

焰のように流れよる吐息を、細い眼が冷たく迎える。灰白色の舌はまだ動く筈であったが、女は依然として沈黙していた。死のスフィンクス。

シュワルツマン現象以外には余り意志も感情も注ぎたがらない千明も、この不思議な嫂と弟の間の神秘な空気には興味を惹かれた。昨日酒井家に同伴して行った時、すぐ警察を呼んだのでまだ落着いて卯助と会話を交したことのない千明は、改めて別室に彼を呼んで、詳しい事情

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

を聞こうとした。

卯助の話はこうであった。

一昨夜のこと、兄夫婦の部屋から、二人の争う声が聞えた。低い押し殺したような声であったので、はっきりとは聞きとれなかったが、愛するだの恋するだのという言葉、先生という言葉、殺すという言葉がきれぎれに耳に入った。暫くして異様な嘔吐の呻きがしたので駈けこんで行って見ると、隅の机につっ伏した嫂が顔をあげて、吐きながら、兄の顔を指さして、「卯助ちゃん、あたし兄さんに毒をのまされてよ」と叫んだ。そしてこの聖ミカエル病院へ運んでくれと頼んだというのである。兄は部屋の真中に幽霊のように立ち竦んで嫂より虚ろな眼でそれを見送っていた。

卯助が、千明に「兄を呼んでこい」と云われてためらったのは、こういう事情があったからである。しかし、すぐにその事情はさておき、兎に角一応兄を呼んでくる気になって帰って行った。するとその兄も、時すでに遅く服毒絶命していたというのである。

「先生って誰だね、思いあたる人はないか？」

「うちの裏に、工業学校の先生がいます。ぼくがそう云ったら、警察ではその先生を呼んだ様子でした。だけど……」卯助は急にどぎまぎと顔を赧らめた。「ぼく、二人の喧嘩していたことが何であったのか知らないんです」

「それで、警察は君を帰してくれたのかね？」

「はい」

千明は首をかしげたまま少年の顔を見つめていて、やがて云った。

「君は嘘をついているね。君がここから帰って行った時、兄さんはもう死んでいたというのは嘘だろう？」

卯助はぎょっと千明を見上げて、みるみる土気色になった。

「まあいい。僕は警察ではない」と千明は微笑を見せて、「君は知っているだろうが、嫂さんは去年の春まで僕達と一緒に働いていた人だ。それだけに出来るだけ事情を知りたいのだが、嫂さんはあの通り黙っている。お願いだから正直に云ってくれ、警察の方へは決して告げない——そうだろう？　兄さんが毒をのんだのが、君が帰るより前であったか、後であったか、は兎も角として、死んだのは朝になって——おそらく四時から五時までの間だったろう？　それは僕が見た時の屍体の状態から逆に計算してわかるのだ。君は苦しんでいる兄さんを、その時刻まで黙って見ていた。それを知らなかったとは云わせない。なぜなら、君は嘘ついたから——なぜ、医者を呼んで来てあげなかったのだ？」

「それは……兄さんが、嫂さんに毒をのませたからです！」失神直前のように開いた瞳孔で卯助は叫んだ。

「なぜ、毒をのませたのだ？」

「分りません……だけど、兄さんはふだんから嫂さんをぶったり、叩いたりしていました」

千明は少年の肩を摑んだ。

「君、君は嫂さんの身体じゅうに痣があるのを知っているかね？」

「知っています。兄さんのしたことです」

千明は尚もたたみかけようとして、倒れそうに肩で息をしている少年を見ると、溜息をついて、

「それにしても……兄さんこそ、君の肉親の人じゃあないのか？」

「ぼく、あたまが……メチャクチャになって……」卯助は突然腕を顔にあてて泣き出した。ふとその袖から腕が、襟くびから背中がちらと見え、千明は愕然として叫んだ。

「君、ちょっと……裸になって見たまえ？」

無理強いに着物を脱がせてみると——おお何ということであろう——この美少年の全身にもあの弓子と同様の惨らしいみみず腫れが、蛇のように這い廻っているのであった。……

「半分手籠みたいにして裸にしたのがいけなかったと見えて、それっきりあの子はタニシのように口をつぐんで返答してくれないのですが、要するに……」

その夜、片桐看護婦は千明医学士がお茶をのみながら塙博士に話しているのを聞いた。

「嫂の復讐のために兄を——文字通り黙殺したというのだね？　肉親の兄を……」

「そうです。もう一歩恐ろしい想像をすれば……いや、黙って兄を見殺しにしたその心持だけでも恐ろしい。一体どうしたというのでしょ

う？」千明は静かに茶碗を卓に置いた。

「先生、先生はあの子が訪ねてくる時の、あの眼の色を御覧になりましたか？　あれは嫂を愛している。嫂と弟との妙な恐ろしい恋愛、それが原因で、房太郎に弓子も打たれ、卯助も折檻された。二人の身体の痣を私はそう判断します。そういういきさつがあったればこそ、あれは敢て兄を黙殺したのでしょう……」

片桐アキは、あの「ねえさん……」という哀切な声音と灼けつくようなまなざしを投げている美少年の立ち姿を思い出した。

「併し、君」と博士は首をかたむけて、「それを迎えるあの女の眼を君は気づかなかったか？　氷のように冷たい――その想像は少し間違ったとこがありはせんかね」

「あの眼！……なるほど、こりゃ少し妙だ……いや、あ子はまだ告白しきってはいないのです。裏の工業学校の教師という重要人物もいるのですし……明日、またあれが来たら、もう少し問いつめてやりましょう。これは非常に興味ある事件らしい。シュワルツマン現象に匹敵する精神病理学的にですな……いや、待てよ」

千明はちょっと考えていて、片桐看護婦を振返った。「僕は少しまずいことをやった。金槌でたたいて、あの子の心の貝殻を閉じさせてしまったかも知れない。片桐君――どうだ、君が明日あの子に尋ねて見てくれないか？　女の、あの柔かな優しい手管で……」

アキはふと千明医学士に怒りのようなものを感じた。可憐な少年の姿を眼に描きながら黙って立っていた。

四日目

「ねえさんは……」

冷たい春雨に濡れて、また卯助がやって来た。が、病室へ一歩入ると同時にその顔に水のはしるように一種の感動がはしった。

病日第四日目の嫂は、昨日までとは別の人であった――裏急後重は衰えたが口内炎が広がり、歯は悉く弛緩動揺し、唇は水腫様に腫れ上っていた。それは壊死による炎症性のものか、腎炎によるものか、恐らく両方の要因が働き合ったためであろうと考えられた。

彼女はもう弟の方を顧みることさえしなかった。その鈍いむしろ恍惚とした瞳は、深いかなしみを湛えて一方に釘づけになったままであった。その視線の果て体温計を振っていた千明医学士は、微笑のめくばせを片桐看護婦に送ると、しずかに部屋を出て行った。

卯助は変りはてた嫂の顔を茫然と見つめていた。息をするのも忘れたかと思われる。「ちょっと……」と片桐看護婦が別室に呼びこんだ時も、彼の顔には驚愕に近い感動が一面に彩られて、凝ったような瞳を、雨滴のながれる窓硝子にそそぎつづけていた。

「酒井さん」と、アキはやさしく云った。彼女は千明の依頼だけに従っているつもりではなかった。いじらしさに胸がいっぱいになって涙が眼にあふれるのを感じた。「あなた、あの方を好いていらっしゃるのね？」

茫然と佇んでいた少年は、看護婦の涙を見ると、みるみるその瞳に涙を盛り上らせた。

「あれは嫂さんですか？」と彼はかすれた声で云った。

「そうですわ」アキは妙な顔になった。「なぜ？」

卯助はうつむいて溜息をつき、また窓の方を見て、ぼんやりした声で云った。「――かわっちまったなあ……」

「あなた、お嫂さんを愛していらしたのでしょう？」とアキはもういちど云った。

涙が少年の頬を伝った。彼はうなずいた。

「あなた……」アキは卯助の両肩に手を置いた。

「そのために、お兄さんにぶたれたのでしょ？」

卯助は虚ろな眼でアキを仰ぎ、首を振った。

「ぼくをぶったのは、兄さんじゃなくて、嫂さんです」

「嫂さんが！」片桐アキは、愕然として叫んだ。少年は声をあげて泣きはじめた。

酒井卯助の思いがけない告白は次のようなものであった。

卯助の両親は彼が赤ん坊のときに亡くなって、殆ど兄と二人暮しの中に成長した。嫂がはじめて来た時、その美しさに卯助は驚異を感ずるとともに、その冷たくどこか高慢な感じに寧ろ反撥を覚えたくらいだった。おとなしい兄が

その一顰一笑に意をはらっているのを見ると、卯助は弓子に憎悪すら感じた。

去年の夏の或る日であった。風呂場に飛びこんだ彼は、中で嫂が行水をつかっているのを見て驚いて飛び出した。そのとっさの間に卯助は嫂の真っ白な背中に数条のみみず腫れが、むごたらしく這い廻っているのを見てしまったのだ。

二三日たった夕、彼が庭に打ち水をしていると、遠い空に、花火が揚った。ぼんやり眺めていると、いつの間にか嫂が来て、しずかに縁側に坐っていた。

「卯助ちゃん……この間、あなたわたしの傷を見たでしょう？」

不意に嫂はそんなことを云い出した。卯助は黙って花火を見つめていた。

「ほかのひとには云わないでね……あれは、兄さんにぶたれたのよ……」

「兄さんに！」卯助はびっくりして振返った。

あの気の弱い兄が――嫂を貰った時、あんなに有頂天になっていた兄が、そんなにひどくこの嫂を打つことがあろうとは思いがけなかった。彼の部屋は離れであったから、それまでそのような気配を夢にも感づかず、それどころか、平生の兄はやはり嫂を恐れるようにおどおどした態度を見せていたのだ。が、そう云われて見ると、一たん胃病が癒って健康を恢復していた兄の頬が最近変に落ちて時々眼がぎらぎらと病的にかがやくことがあるのを思い出した。

「どうして、ぶつの？」

「どうしてだか知らないわ、ただぶちたいからなんでしょう」嫂はゆがんだ笑いを片頬に彫った。「男って、暴君ね……あたし、女に生れて不幸だとおもうわ」

また花火が揚って、消えた。嫂の笑顔は夕顔のように寂しかった。卯助はこの時、突然この嫂に満身の同情と愛情を感じたのだった。

「嫂さん……」と彼は夢中で云った。「じゃあ、兄さんにぶたれてシャクに障ったら、ぼくを代りにぶつがいい。幾らでもぶたれてやるよ」

云ってから冗談に見せようとして彼は笑った。が、嫂は光る眼でじっと見て、そして匂うように笑った。

「……ほんと？」

「ほんとだよ」卯助は不意にあかくなった。

卯助が弓子に打たれはじめたのは、実にこういう奇妙なきっかけからであった。「あたし、昨日の夜、また兄さんにぶたれてよ」それが、きょう卯助が打たれる理由であった。それは兄の留守中、全く秘密に行われた。驚いたことに、卯助は嫂にぶたれるのが苦痛よりも愉しかった。そのうちに嫂は寒竹の鞭を持って来た。それが兄が嫂をぶつ道具だと聞いて、その黒血のひかりが卯助につらぬくような甘美な戦慄をあたえた。

その折檻の理由は、どう考えても超論理的であった。卯助こそは「いい面の皮」であった。はじめ彼はぶたれて笑った。しかし、鞭の唸りの間に閃めく嫂の顔が蒼ざめて、眼が憎悪に光っているのを見て、卯助はぎょっと瞳をひらくことがあった。憎悪という感情まで兄の代りに自分が受けているのか？　奈落の底へつき転ばされたような感情は、彼が嫂を愛しはじめている反証であった。その疑惑の蕾を鞭が打ち散らし、こんどは牡丹のように笑んだ嫂の顔が掠める。暴風のようなその拷問が終ると、けろりとして彼にやさしく、兄が帰宅すると澄ましていた。

嫂は一体自分を愛しているのか、憎んでいるのか？　まもなく卯助にとって、そんなことはどうでもなくなった。彼の頭は悪魔のように濁って荒廃して行った。夜も昼も、阿片中毒者の幻聴のように鞭の唸りと嫂の笑い声が耳に鳴った。爽やかな夕、玉蜀黍の葉蔭に、血と汗にベトつく身体を運ぶと、胸の、腕の、太腿の痣を撫でさすり、卯助は甘い悲哀と魅惑的な疼きに涙を流すのであった。そして、あの嫂をぶちまくる兄に対して、次第にはげしい嫉妬と憎悪を感ずるようになっていった。……

「そしてあの夜――」と片桐アキはふるえる声で塙博士と千明に報告した。

「あの夜、卯助さんは弓子さんに、ちょっと話があるから十時頃庭で待っていてくれと云われたのだそうです。だから卯助さんは、あの晩はじめて御夫婦の争う声を聞くことが出来たのです……ここから家に引き返していった時、兄さんが昇天をのんで悶えていたというのは嘘では

なく、それを見おろしたまま、兄への愛と嫂への愛とのたたかいに苦しみながら……あの人の云ったように頭がメチャクチャになって……到頭見殺しにしてしまいました！　嫂さんへの愛が勝ったのです。つまり兄さんを憎みとおしたのです……けれど、兄さんは最後まで弓子さんと卯助さんの間の秘密は知らなかったことは確かで、息の絶えるとき、涙をながしながら、卯助、おれは弓子にだまされたよ、と、こう云ったといいます……」

扉の外を、病人運搬車が幽かに軋りながら通り過ぎていった。

「さあ、これでもう、あの卯助さんは知っていることは何もかも打ち明けてしまったでしょう。これ以上嘘をついているとは信じられません……大へん素直な感情になって、あたしに話してくれたようですから……」

「やはり、女の手腕だね」と千明は微笑した。

「恋愛の本質は疼痛なり、ってどこかで聞いたが、僕などにははじめてその意味が了解できる話だな――おかげで卯助の心理だけははっきりとなった。ところで、あの森君の心理は？　今の話だと、あれは卯助を真に愛していたのではなく、夫に打たれる腹いせに弟を利用していただけだ。そう受けとれるようだが……奇怪な論理だな、理解できん、謎はとけるどころか一層深くなったようだ。そもそも酒井房太郎はなぜ弓子を打っていたのか？」

「やっぱり工業学校の先生という人が、その間にあったんじゃございませんでしょうか？　最後に弓子にだまされた、と云っているところから見ましても……」

「いや、それは、きょうまた刑事が来たんだがね。どうも関係はないらしいんだ……そうだとすると、先生云々というのは卯助の聞きちがいか、或はこの悲劇の性質とは全然無関係な言葉であったのか……それとも……」

千明はふと塙博士の方を光った眼で見て、急にはっしと手を打った。

「科長ひょっとすると、酒井房太郎はあのサディストじゃなかったでしょうか？　そうです。そうです。そう考えれば工業学校教師なるものも一つの存在意義を帯びてくる、妻に単なる肉体的苦痛を与えるのに満足出来なくなって、無縁の人を姦夫として設定し、それで虐待の快感をたかめるという――よくある奴です！　その病的な頭が更に悪化して、しまいには、想像的姦夫が事実であると、自分でも考えてくる。そしてこの悲劇が起ったのじゃあないでしょうか？」

「そうかも知れん……では、あの女はなぜ弟を打ったのだ？」

「わかりました。今の奇怪な論理がわかりました。夫のサディスムスが妻に伝染したのです。いったい、そういう心理の萠芽は誰にだってあるのですから、培養法如何によっては成長します。げんにあの卯助にしても次第にマゾヒスムスの快感に耽溺するようになっている……」

「それだ」と博士は云った。「僕は本来、房太郎よりも弓子こそマゾヒストではなかったかと考えているのだ」

ちょっとの沈黙の後、千明が何か云おうとするのを博士は眼でとめて、

「待ち給え、マゾヒスムスの女がなぜ卯助を打ったのか、と君は云いたいのだろう。しかしサディスムスとマゾヒスムスとは元来同一人物が兼備していることが多いので、シュレンクノーチンクが両者を一括して疼痛性淫楽症という言葉を新作した理由もここにあるのだ。一たん、健康を恢復した酒井がなぜだんだん痩せて来たのだろう？　それは弓子のマゾヒスムスを満足させるために鞭をふることを強制される苦痛のせいではなかったろうか？　それくらいだから、まして妻のサディスムスを満足させることなど、到底彼の精神的に肉体的に耐え得るところではなかったろう。そのはけ口を弓子は卯助に求めた。卯助は明らかに夫の代用品だ。代償性サディスムスの犠牲だ。姦夫の存在をほのめかしたのも、寧ろ弓子の方だろう。それで夫を精神的に苦しめ、したがって肉体的に自分が苦しめられる、一石二鳥の名案ではないか？――こんどの悲劇も、その筋書作者は女自身ではないかと思いあたるフシがある。そう判断する非常に重大な理由は、君は憶えているか？　弓子が最初ここに来た時、のんだ昇汞は八グラムだと君に告げたというではないか？　どうしてあれはそれをはっきり知っていたのだろう？」

片桐看護婦はあっと叫んだ。
「暴力で毒を服ませようとするのは、絞め殺すより容易ではない。女ははっきりと自分のものの性質と量を知っていてのんだのだ」
「先生」と千明は顔をあげて、おずおずと、
「それでは、なぜ森君は、夫に毒をのまされた、など云ったのでしょう？」
「マゾヒスムスの極致だ。わかるだろう？　同時にサディスムスの極致だ。わかるだろう？　所詮は妻の悪癖だと信じていた房太郎も、事ここに到っては、余りのことに仰天して、絶望して、あとでついふらふらと毒をのんでしまった。弓子にだまされた、とはそのことを云ったものだろう……」
「先生も、あまりものの哀れを解されるようには思われませんが」と千明は笑って膝を打った。
「感心しました。事件の痂皮が、それで落ちたような気がします」
「いや、調子にのって想像が少し飛躍しすぎたようだ」と、博士は急に苦笑して云った。「それに、何処か足りないような気もする。なにしろ、かんじんの本人がスフィンクスをきめこんでいるんだから……」

五日目

「吾々は、あっちこっちと皮膚の上から聴診器をあてて深部の病竈を探し求めているが、解剖してみてはじめてそれを発見することが稀ではない……」
五日目の午後、回診にまわる前に塙博士がこんなことを云った。
「病竈自身が、ここだ、こうなんだ？　と口をきいてくれたら、一番てっとり早く、確かなんだが……あの女がそうだ。真相はあれだけが知っている。結論はあれによってのみ与えられる。かよわい女だ。それに口を開かせることが出来ぬ！　刑事も、吾々も、法も科学も、なす術がない。その恐ろしい力は何か、それはあの女の背後に立っている死の力だ。その威厳の前には、あらゆる生けるものは匍伏するよりほかはない……」
しかし、その点では、既に死の不気味な手は女自身の口をも覆おうとしていた。あらゆる薬品、あらゆる機械、人間の智慧の必死の抵抗にも拘わらず、悪魔のような炎症は、徐々に骨髄にくいこみ、牙関緊急が嵩じて開口は全く不能となり、腫れあがった唇の間から、腐ったような舌がわずかに覗かれた。腎臓の緊張を除く腑臓莢膜剝離手術をするために、患者を外科に廻すように塙博士は命じたが、その顔は夜のように暗かった。
ちょうどそのとき、また卯助がやって来たが、その恐ろしい嫂の顔を、そっと遠くから覗きこむと、忽ち顔を覆って、しばらくしてから、「ねえさん……」と呟いた。その声にはいつもの胸の奥底からこみ上げるような吐息のひびきがなく、アキは妙な顔になって振向いた。少年はそのまま部屋の隅にしりぞいて、虚ろな眼を窓の外の雨に向けたまま、じっとしていた。焰が消えて、さめはてた素焼の陶器のような横顔であった。
「卯助さん」と片桐看護婦は呼びかけた。卯助はぼんやりとアキを眺めて、ふっとその瞳にひかりがともった。
「きょう、嫂さんの手術をしますから、それまでいて下さいましね？」
「はい！」と卯助はアキの顔を見つめたまま云った。
しかし、暫くして塙博士や千明医学士が出てゆくと、卯助は、おずおずと片桐看護婦の傍へいって、田舎から呼んだ伯母さんをつれてくるからと断わって、そっと帰って行った。
十一号室を出て以来、塙博士は黙々とした暗い顔で何ごとか考えこんでいる様子であった。暫くの後、片桐看護婦が内科の医局に戻ってくると、博士は椅子に坐ったまま、放心したような眼を窓の青葉になげて煙草を吹かしていたが、ふと千明を顧みて呟くように、
「いったい、森君はなぜ事情を話してくれず死のうとしているのだろうね？」
「羞恥心でしょう。ああいう事情であったら——」
「それでは、どうして牛込からわざわざこの病院へ運ばせたのだろう？」
「それは、一年前まで自分がここに勤めていたのですから、知り合いや朋輩も多いことです

し、――」

「矛盾していやしまいか？」博士はなおも放心の顔つきであった。煙草の灰が膝に崩れ落ちた。

「羞恥心があるなら、どうして知り合いの多いこの病院をえらんだのだろう？　ここへ来れば裸の身体を見られることくらい勿論知っている筈だ。その身体の秘密を皆が覗いて、不思議に思えば、例え本人は口を緘していても、卯助にきくだろうことも想像している筈だ……それでは、知り合いの多いこの病院を信用して選んだとすれば、なぜ悲劇のいきさつを打ち明けてくれないのだ？　少くとも、このわたしの人柄は知っている筈だろうに……」

「その矛盾は」千明はとまどいの色を通り過ぎさせた後に、「なにしろ、あの事態です。まして女ですから……」

「その事態はあれ自らが作ったものではないか？　女は女だが、あれの心の中には、何か一すじの意志がつらぬいている。あの執拗な沈黙はその証左だ」

「先生」と千明は身をのり出した。「するとそれは、どういうことになるのです？」

「わしの想像が間違っていた、ということになるのだ」博士は煙草を投げ捨てて、椅子をこちらに廻した。その瞳の奥に異様な光が漲って来た。「間違っているというより、想像がまだ足りないと云った方がよかろうか……わしは妙なことを考え出した。いったい、あの女は、しんじつ夫を愛していたのかね？」

遠い小児科の方で恐ろしい泣声が聞えた。なぜか、ぴくんとして、片桐看護婦はカルテを整理していた手をとめてしまった。

「むろん、変態性慾者の愛の現われ方は普通の女のそれとは違うだろう。しかし、根本に於ては一種の情熱であることに相違はない筈だ。……ところが、苦痛の中にも昏迷の中にも、あれはいちども夫の名を呼んだことがない。尤も夫は死んでいた。しかし……その夫の死を告げられた時あれはどういう反応を示した？　表情筋ひとつ動かさなかったと、君達は驚嘆してわしに告げたではないか？……わしは今、酒井房太郎が死ぬ直前、だまされた、と云ったのは、もっと深刻な意味を持ってはいなかったろうかと考えている」

「どうも、わかりません」千明は頭をかいた。

「ねえ君……こんどは酒井の心理を想像して見ようではないか。吾々の記憶によれば、房太郎は平凡な、おとなしい人間であった。その男が美しい森君を掌中のものとして、どんなに有頂天になり、妻を大切にしたかは卯助も認めている。ところが妻は病的なマゾヒストだった。この想像は動かすまい。苦しみながら、彼は妻の満足を買うために鞭をふるった。そのうちに彼自身も病的なサディストに変っていったかも知れない。と同時に一層狂的に、肉体的に――従って本質的に弓子を熱愛しはじめたろう。しかし彼自身はあくまで姦夫の存在など架空のお芝居的人物だと、心の奥深く信じて疑わなかったのだ。――ところが、最後の夜、それが妻のお芝居でなく、真実であると、はじめて知ったならば……」

「それで、だまされたと云ったのですか！」

「と、わしは想像するのだ。森君は、房太郎など愛してはいなかった。夫の彼もまた、代用品であったのだ……そのことに、房太郎がやっと気づいたとしたならば、さっき述べたような彼の心情から、茫然、崩壊、暗黒、そして絶望して毒を仰いだのも、弱い人間として或は納得できる心理ではあるまいか？」

「では、やはり」と千明は叫んだ。「工業学校教師！……しかし、先生……」

「待ちたまえ、どうしてわしがこんなことを考え出したのか、それはさっきから、弓子の心理を想像して辿ってみたからだ。弓子は或る別の男に打たれる快感を空想しつつ夫に打たれていたのではないか――先ずこの想像から推理を進める。さて一日女がふっと考えてみれば、自分は全くばかばかしい立場にある。現実には生きて居らず、夢の中に生きているようなものだ。しかも狂った薬車の夢だ、ほんものの男は冷たく、遠く――近くで燃えて自分を殴っているのは代用品だ。男への軽蔑、憎悪、復讐これが病的な女の頭の中で転回して、弟の卯助をぶちのめすようになる。卯助を打ちながら、彼女はばかな夫を打っていたのだ。実は、冷たいほんものの男を打っていたのだ！　ところで、これは一層奇型的な悪夢に過ぎない。女は虚偽に絶望

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com